

2023 年度トレーナー検定試験 試験結果講評

2024 年 3 月 1 日

特定非営利活動法人 小学校英語教育推進協議会

トレーナー認定部会発行

実技試験

○模擬授業

実技試験では 5 つの題材から授業内容を 1 つ選び、導入部分の授業をすることが課された。「導入」とは本格的な授業に入る前に、児童に題材に対する興味・関心を持たせる活動である旨、実施要領に明記されている。導入は、単に子どもたちを楽しませたり、文型をインプットしたりするためのものではない。指導者の英語を聞いて、「この単元のゴールでは、こんなことをするんだ！」と子どもに気付きを与え、動機付けをしたり、ゴールまでの道筋をイメージさせたりする役割を担っている。模擬授業では、挨拶やウォームアップが終わった想定で、本時の活動の「導入部分」を 5 分間でどう魅せるのかが評価される。

小学校英語教育では、指導者の発話について話すスピード、言葉の明瞭さ、1 文の長さ、使用する語彙、文法的な正確さ、発音の正確さなど、小学生が聞いて理解できるインプットの条件を、しっかり考えることが求められる。模擬授業でも児童に理解可能なインプットを与える英語で話せるよう、練習を積んでほしい。

また、“Repeat after me.” のような強制インプットや、形を暗唱させてから発話に導こうという意図が感じられる授業が散見された。授業では、繰り返し、意味のある、理解可能な文脈で英語を聞かせ、児童の「気付き」を大切にしながら理解・活用へと導いていくことが肝要である。そのことを、トレーナーが現場の先生方に身をもって伝えていく必要がある。

児童の発話に対しては、まずほめて、正すべきところは言い換えることが大切である。例えば、“What’s this shape?” の問いに対して児童が “It’s triangle.” と答えた場面では、指導者が “Yes.” とだけ答えて次の質問に移っていたことがあった。まず、どのような発言でも指導者は児童の発話を受け止めて、“Oh, nice try!” など、児童のチャレンジを肯定的に受け止めたい。その上で、正すべき所は “It’s A triangle. Good, Sakura.” のように正確に Recast ができることがトレーナーレベルの指導では求められる。

○コメント・アドバイス

全体的に、授業改善のためのアドバイスは説得力に欠ける印象を受けた。よりよい授業にするためには、理論に裏付けされた論理的な指導助言が必要である。まずは、授業者の指導の良かった点を的確に示した後、指導者を育てるという観点で、授業者が納得できるよう、指導者としての自身の経験も伝えながら、こうすれば指導が向上するという具体的な例示ができるといいだろう。

小学校英語指導者育成トレーナーには、その優れた指導力で指導者のロールモデルとなるのみならず、授業に対して適切なコメント・アドバイスをしながら、指導者が教育者とし

てより成長していく手助けができる人材であることが期待されている。トレーナーを目指す上で、指導技術に関するフィードバックだけでなく、コメント・アドバイスを通して、授業者がもっている言語理論や指導観など言語学習に対する考えを引き出し、どのような指導者を目指すのかを授業者自身が明確に描き出せるような対話力を磨いてほしい。

口述試験

領域 1

領域 1 では、まず第二言語習得の用語や理論を正確に説明できることに加えて、理論に沿った英語学習法をそれぞれの学習場面に応じた提案ができる能力まで必要となる。

設問 1 は「インプット」がどのように、あるいは誰によって生成されるのかを説明する問題である。インプット仮説は自然習得をベースとした考え方だが、適正なインプットを与えるのがもっぱら教員になり、異なった学習者一人一人に適正レベルのインプットを豊富に与えることが難しくなる。インタラクション仮説は、それを補う仮説と言える。教員と学習者あるいは学習者同士が対話することで、それまで理解不能だったインプットを適正レベルのインプットに修正できることを指摘した。これはペアワーク、グループワークを教室活動に組み入れる理由付けともなっている。今回の試験では、インプットを生成するものとしてのインタラクションの作用を説明できた受験者はいなかった。この問いは、対話によってどのように習得に有効なインプットを生み出せるかということが問題であって、アウトプットに関する言及は質問の意図とは異なる。

設問 2 は、「児童が『正しい』英語の発話ができるようにするために、音声規則や文法規則について説明を日本語でするのが効果的かどうか」というものであった。第二言語の習得には、「正しい形」を知ることよりも、「意味の通じることば」を生成することが大事だと考えられる。多くの理論で形式の正しさについての明示的な説明（日本語であろうと英語であろうと）は、英語コミュニケーション能力の獲得には直接結びつくことはないと考えられている。ただし、言語形式に関する明示的な説明がまったく意味がないということではない。まず説明を受けてからそれを自然に使えるようになるまで練習をすることで習得に変換していくという理論もあり、これを示した受験者がいた。また、説明を受けることで、学習者が言語活動の中でその形式に自分で気付けるようになるという間接的な役割も考えられる。ただし、説明を中心に授業を組み立てるのは、児童の英語発達にはあまり有効ではないであろう。

残念ながら今回の試験では多くの受験者が理論の正確な理解の部分でつまづいていた。また、ほとんどすべての受験者がこれまでの指導体験から「どう教えるのか」といった視点からの回答をしていた。学習者の英語がどのように発達していき、その習得過程を指導者がどのようにサポートしていけるのかという視点をもっと必要である。その基盤を与えるのが、第二言語習得の理論であり、その理論に対する深い理解がトレーナーの資質であると考えられる。

領域 2

領域 2 は学習指導要領に則り、小学校「外国語（英語）」の目標を理解しているか、またそれを現場での実践に照らし、現場の状況に応じた運用を視野に入れて解釈できているかを問う問題であった。小学校段階での「読むこと」と「書くこと」の目標について、中学校とはどのように違うのかをしっかりと押さえた上で回答する必要があった。現在のトレーナー有資格者のなかには、自治体や小学校における研修などに携わり、指導やアドバイスをを行う役割を求められている者も多い。まずは基本となる学習指導要領をしっかりと読んでいくことが求められる。さらに、与えられた回答時間を十分に活用するためには表面的な理解に留まらず、小学校の現状や課題に照らして述べられるように準備する必要がある。

この口述試験は新しい時代の学びに即した形式で、受験者はテキストやノートなどのレファレンス等を手元に置いて、参照しながら回答することが認められている。このような形式の試験においては、ただ覚えている、知っているということだけでは高い評価につながらないのは自明である。学習指導要領について、参考資料等にもあたり、そのもととなる理念を十分に理解し、咀嚼し、自分の言葉として説得力を持って他者に伝えることができるかが問われている。受験者の中には、新しくなった学習指導要領の目標や、言語活動を中心とした学びについて十分に理解しておらず、旧来の刷り込み、教え込み型の英語教育を是とする **teacher belief** にまだとらわれているのではないかと受け止められる回答が散見された。領域 1：第二言語習得理論をしっかりと学んできたのであれば、新しい学習指導要領の理念と目標に寄り添った学びは、多くの先行研究に基づいた科学的根拠のあるものだと理解できるはずだ。外国語の学びにおいて、学習者主体の、言語活動を軸とした授業を展開することの必然性、そして学習過程に起こる **error** を容認しながら、相互に伝え合おうとする姿勢を大切に育むことの重要性は言うまでもない。

トレーナーとして求められる資質と能力は高く、かつ多岐にわたるが、領域 2 においては小学校の現状と課題について問題意識を持ち、日ごろから機会を見つけて学ぶことを推奨する。文部科学省のホームページなどでアップデートされる情報に触れ、研修会や学会などに積極的に参加し、最新の知見に触れ視野を広く持った学びを継続してほしい。

領域 3

領域 3 では英語指導法の知識と、英語運用能力が同時に問われるので、配点は最も高く設定されている。今回の設問は課題テキスト *Teaching Young Language Learners* より、**Language modification** 「言語修正」、**negotiation of meaning** 「意味交渉」に関する抜粋文を扱った。

テキストの音読は、正確さ、流暢さ、発音、意味のまとまりごとに区切っているか、相手に伝わるように読めているか等の基準で採点を行った。語尾の **s** の抜け等のマイナーなミスはあったものの、ほとんどの受験者が概ね基準に達していた。正確な個々の発音のみならず、強調したい箇所を抑揚をつけることで、内容がより伝わりやすくなる点も押さえておき

たい。

設問 1 は、**language modification** が言語習得に果たす役割について問うものだった。ここでは主に、英文の理解度と、自分の言葉を英語でまとめる力が問われるが、まず **language modification** 「言語修正」の定義を正確にテキストから読み取る力が試された。ここで生じた誤解の一つは、「修正」という言葉の意味を、教師が児童の英語のエラーを修正することと解釈したケースである。**Language modification** はあくまでも **communication breakdown** が生じた場合、話者が言語修正を行うもので、言語の誤りを正すことではない。言語修正はお互いにコミュニケーションを成立させるために何を行うかということが重要で、教師側、児童側、双方の視点から見ていく必要がある。

設問 2 は、**negotiation of meaning** 「意味交渉」について、実際に教室で行われている事例をもとに説明することが求められた。設問 1 と同様に、児童の間違いの修正を教師側がどのように行うかという視点の回答が多かった。普段の授業が言語の形式や、知識・技能にフォーカスされている分、意味交渉の本来の理解が曖昧になっているように感じられた。つまり、言語を正しくやり取りさせなければならない、という暗黙の前提があるようだ。小学校「外国語」の目標である、コミュニケーションの基礎を養う、という意味合いをもう一度とらえた上で、意味交渉の役割を考えたい。豊かなやり取りが生み出される授業を目指していきたい。